

## かおる

——香と連歌——

日本語日本文学科 鈴木 元

香を焚きその香を愛でるといふ行為が、遊戯化や様式化を経て芸能と化し、流派を形成し、そして香道へと至る重要な節目は室町後期にあった。

香道形成期にあたるこの時期の香儀礼の実態については、関連する資料の紹介も未だ十分ではなく、既知の古伝書についても、この当時の状況を知るための資料として適当なかどうかというように、資料の成立時期や性格の認定に、まだ多くの労を費やす必要を残す段階であるようだ。ただし、幾つかの資料からは、室町期の聞香の文化が連歌と密接な関係にあったことを、確かに読み取ることができる。そこで以下には、香道形成期における連歌（あるいは連歌師）と香のつながりを紹介し、江戸時代の資料をも参照しながら、香道の世界が連歌をいかに取り込んで様式化していったのか、その一端をうかがうこととしたい。

### 香道宗匠

江戸時代刊行の香道伝書のひとつ『香道千代の秋』（元

文元〔七三六年七月刊〕は大枝流芳の編。ここに「洛西三雙轡」の付した序を開き見れば、

…香を翫の事既にふれり、文亀の頃より上に逍遙院公ありて下に志野氏世に出、香道是より定めぬ。志野は三世家声を墮ず、これにつげるものは建部氏なり。

其後米川氏、志野の古流を受継で、かへつて己が一流を起す。其比の諸士に卓越すといへども、其後継るものなし。名のみ残て其書世に多く伝はらず。何を以か継ておこすものあらむ哉。米川没て香道衰微せり。爰に先師流芳子、御家の末流を汲て其余の流を集て大成し、香道の古法を起むとはかる。

その記述は逍遙院公（即ち三条西実隆）に始まり、香道家としての志野家の登場、建部、米川の各氏が出て香道の流派を形成したことにふれ、その流れをうけた流芳子が衰微した香道の古法を起こそうとして著したのが、本書に他ならぬとの事情を明かす。

このような序文の記述に対応するように、本文中では「香道宗匠」という一項目があり、京極佐渡判官入道道誉、慈照院義政公、志野三郎右衛門宗信以下、「宗匠」の名が列挙されている。筆頭に掲げられているのは婆娑羅大名として名を馳せた、佐々木道誉。奇矯なふるまいで知られた道誉が、香の遊びについても際だった催しを実施していたことは、太平記などに伝えられるところである（本誌第五

号、拙稿「よりあう」参照)。どこに始まりを置くかには、見解の分かれるところはあろうと思われるが、香が遊びとなるエポックメイキングに導誉を位置づけるのは、一つの見識であろう。ただし、同書では同時に「香の御家は三条西殿也、逍遙院公より今に御相承なり」とも記し、香道の家の起源を実隆を祖とする三条西家にあり、との立場をとる。序において「逍遙院公」の名をまず記し、「香道是より定めぬ」とするのも、同じ理解に立っているのである。

連歌研究の側からすれば、実隆の名からまず真つ先に想起するのは『新撰菟玖波集』。准勅撰のこの連歌撰集の成立には、実隆の多大な貢献があった。また彼自身連歌を好み、多くの句を残している。連歌にゆかり深い人物である。まずはそうした人物が香道の祖として伝えられるに至ったことを、興味深い事実として取り上げておきたい。また、同じく「香道宗匠」の中には、肖柏、玄清の名が上がつていることも注目してよい。いずれも当代有数の連歌作者である。

## 実隆

だが、このような伝書の常として、記載の内容をそのままに鵜呑みにしてよいのか、必ず問題となるところである。はたして史実ではどうであったのか。

話題の人物実隆は、膨大な量の日記を残している。『実

隆公記』と呼ばれる記録で、当時の公家生活をはじめ、世相や文化全般の理解に欠かす事のできない史料である。実は『実隆公記』を見ると、大枝流芳の香道伝書が実隆を香道の祖と祭り上げるのも、故なしとしない事情が確かに認められる。本間洋子氏がまとめておられるように、『実隆公記』や禁中女官の日記『御湯殿の上の日記』等からは、貴族たちの間で当時たびたび香の会が催されていた、また、そうした会に実隆が度々参加していたことも確認されている(「香道の祖」三条西実隆についての再検討)『武蔵大学大学院人文科学研究科論集』一号、二〇〇一年)。人が寄り合い、香を楽しむ会が頻りに催されるようになる時代相の中、その中心にいた貴族の一人が実隆であったことは、紛れもない事実である。

ただし混乱のないよう、まずはつきりさせておかなければならないが、本間氏の分析によれば、実隆がそのような香の会で指導的役割を担っていた事実は認めがたいとされる。故に「香道の祖」というのは、後代に附会されたイメージでしかないということになる。だが、記録類の伝える当時の香会の状況からは、連歌とのかかわりについて幾つかの興味深い事実を知る事ができる。一つは実隆邸で催された香会においては、実は連歌師の宗祇が運営にあたって大きな関与をしていた様子が窺われること、そして、予てより指摘されていることではあるけれども、一般に香会の席

では連歌や歌会あるいは十種茶などが併せて催されることである。

連歌師の関与や、同じ席で歌や茶の遊びが演じられることそのものは、所詮、現象面に關する指摘にしか過ぎないことである。しかし、会席という空間を共有することが内実の面でなにかの影響関係をもたらしていくであろうことも、また自ずと予測されることではある。本間氏は「香りと文学の融合」と称して、幾つかの興味深い事例を紹介しているが、その中から特に連歌にかかわるものとして、明応八（一四九九）年三月十五日の記事を示してみよう。

『実隆公記』によれば、この日、勸修寺政頭、富小路俊通、宗祇、宗長といった面々が実隆邸を訪れ酒宴が行われたらしい。座興として連歌が詠まれたが、酒の席ゆえ懐紙には書きとどめなかつたようで、詠み捨ての数句のみが日記に記されている。その後、聯句になつたらしく、

花紅香荷葉 俊通朝臣

柳緑酒青樓 予如此对之

との一聯が書きとどめられている。前句は俊通の句で、それに実隆が对句仕立てで付けたということだ。禅語「柳は緑、花は紅」を踏まえつつ、「香」に「酒」と応じた形になっている。後述するように、同時代の連歌作者肖柏は『三愛記』なる一文を残しており、そこには彼の愛したという「花」「香」「酒」の三つについて綴られている。同記によ

れば、「荷葉」とは、当時の薰物なまもの（練香とも。複数の香料を練り合わせて調合したものを稱）の名でもあった。香と酒とは、当時の文人たちには自ずと対をなすものとして理解されたであろう。一句、あるいは二句一聯で見ても、句意にあまり論理性は感じられないだろうが、对句による付句では、いかに対の構成を作るかに主眼があり、あまり意味内容は重視しない傾向にある。

さて注意したいのは、『実隆公記』の同日条にはこの聯句の下に「薰落葉 一炷之間如此」と記されているという点である。「如此（かくのごとし）」の指す具体的内容が必ずしも明瞭ではないが、おそらくは本間氏の指摘するように、薰物「落葉」を焚きつつ聯句を行い、その芳香漂う間を刻限として付句に興じたということなのである。嗅覚を楽しませる香りを時間に変換しつつ、それをタイマー代わりに用い、聯句の遊戯に活かす洒落た催しであった。

---

聯句中の語「青樓」は妓楼のこと。「酒」から「青樓」が導かれるのは、酒は妓楼で飲む酒が一番というような一般的な連想と取るよりは、ここは杜牧の「遣懷」詩を念頭に置くものと見たい。当時の聯句作者にとつては座右の書であったと思しい『韻府群玉』では、「青樓」の語は同詩の一句「贏得青樓薄倖名」とともに掲げられる（卷八・平声尤韻）。「遣懷」詩は、南北朝期に日本でも刊行された総集『聯珠詩格』の卷六に収められ、漢詩に關心をもつ知識人によく知られていた

---

と思われる。

落魄江湖載酒行（江湖に落魄して酒を載せ行く）

楚腰纖細掌中輕（楚腰纖細、掌中に輕し）

十年一覺揚州夢（十年一覺揚州の夢）

贏得青樓薄倖名（贏ち得たり、青樓薄倖の名）

ただしここで言わんとするところは、所掲の句が、この詩をふまえていないと理解できないということではない。「酒」から「青樓」が連想される知識基盤として、杜牧詩が想定されるであろうという、そこまでのことである。

また、改めて確認しておく必要はないことかもしれないが、『実隆公記』の記事に見える「落葉」とはこれも薫物の一種で、荷葉とともに古来より「むくさ（六種）」の薫物と称される。後小松院の作と伝えられる『むくさのたね』によれば、「荷葉はなつのはちすのすゞしき香に：落葉はふゆの木のはのちるころ、はらくとにはひくるに」（新校群書類従）通うとされた。

## 香道伝書より

香の世界においては、古来より名香の一覧を列挙することと、ある種の意義を見出していた。書簡文例の体裁をとった物尽くしの書、室町期の往来物『尺素往来』『新札往来』等に、「名香ノ品々」（『尺素往来』巻上、『日本教科書大系』）が並べられたりするところにも、当時の香の隆盛がしのば

れる。

名香の一覧は、当然ながら香道伝書にも及ぶ。

今日に伝わる伝書の一つに『名香録』がある。天文四年の宗温奥書をもつ由緒ある資料ではあるが、『習見聴諺集』（興福寺僧実隆の書き留め記録）によりその奥書の信憑性が保証されたことで、安心して室町期の伝書として扱うことができるようになった（矢野環氏「香道の古伝書―『習見聴諺集』所収伝書など」『儀礼文化』第二十三号、一九九六年）。同書はその名のとおり、古今の名香をリスト化したものだが、単に名を上げるだけではなく、各香名の下には春夏秋冬や恋・雑・名所といった分類が施されている。この他、源・夜分・朝時分・居所・水辺という分類もある。連歌に馴染んだ者であれば、これらの分類用語を一目見ただけで、それらが連歌の用語を踏襲したものであることは察知できるはずだ。「朝時分」だけは聞き慣れぬことばだが、「夜分」との対になるように新たに作られたものであろう。

香名にこのような分類が為される理由は、香道の用語でいう「炷継香<sup>たきつぎじょう</sup>」と関わるものとして説明されることが多い。炷継香とは要するに、前の香に付ける感覚で次の香を選んで炷く遊びで、その変化と連続を楽しむところに眼目があったと見てよい。炷継香という用語は室町期には見られないのだが、これも矢野氏が指摘（前掲論文）しているように、茶道書『烏鼠集四卷書』巻四に含まれる香道関係

記事の中に、「源氏の香」（先の分類でいう「源」）の次には、同じく「源氏の香」を続けて炷くことを指示する規則が記されており、連続して香を炷く作法の存在と、続けて炷く香に前の香との関わりを問題とする意識の自覚が、この当時あったことは確かである。連歌の式目からの類推で、こうした香の規則と分類が作られていたと見て誤りあるまい。また『烏鼠集四卷書』は、こうも述べている。

一、香は先にたくとて賞翫にあらず。後にたく程思惟工夫ある也。すまう、法問の如也。銘香は初めに指合ぬやうにたく也。乍去、四季・恋・雑の口伝あり。

（今日庵文庫蔵本、『茶道文化研究』第一輯）

故に「後に炷く程、思惟・工夫」が必要だということになる。同書ではそれを、「相撲（すまう）・法問の如し」と喻え「連歌のごとし」とは言わないが、すぐ直後に現れる「指合ぬやうに」という注意の指示の用語もやはり、連歌での用法に近い、あるいは連歌を意識した用法、と言つてよい。

指合さしあひ連歌又ハきんく（『和漢通用集』）

こうした文脈の中で「四季・恋・雑」に言及していることを、やはり見落としてはならないだろう。このようなところにも、連歌師の関与というものが（直接的であったか否かはともあれ）窺われるのである。

香道の作法や様式化には、同じく会席の芸能・文芸で

あった連歌が、濃厚に影を落としているようだ。伝書の記述内容に関していうならば、両者の影響関係はもっぱら連歌から香道へという関係と見てよい。連歌伝書を見わたしても、その記述の中にはほとんど香道からの影響は感じ取れない。無論、中には次のような記事が記されるところがないでもない。

…さて一座の剋限兼て定まりなば、その折を過ぎず進みよりて、座列すべし。名香の匂ひ空薫物など、心にくく燻り出たるに、発句よき程に読進し、静まりはてたる、殊勝也。（『若草記』、『連歌論集四』所収）

同書は明応六一四九七年、後土御門天皇の勸覧を経て以降に流布した作法書。引用部は「会席の様は、いかに構へ、いかにあるがよろしき物にや」との問いに、兼載という連歌師が答えた箇所である。但しこれは、既に「よりあう」で触れたように、座敷飾りの香炉から燻り出るもので、香会に続けての連歌会という場を想定したものはなからう。様式化した香会が整えられる以前に、香や薫物は会席の床飾りとして連歌の場に入り込んでいたのである。

### 深見草香

さて、最後は少し趣向を変えた話題で締め括ろう。

安永三一七七四年刊の『香道袖の橘』は、上野宗吟が「古書」より「先祖の教、香道の条目百十八箇条」を示すため、板

に起こしたと自叙に述べる香道書である。その内容を時代的にどこまで溯らせることが可能なのか、その点は今後の研究に委ね保留しておこうと思う。

上巻冒頭には「新組香拾五品」として、伝来の組香を紹介している。この組香とは、ある主題のもとに複数の香を組合せ、それらを順次炷き上げていき、香名を当てるという遊びである。ここに取り上げたいと考えるのは、その一品「深見草香」の記事である。香名の下に「一二三軒組之」とあり、「一二三軒」なる人物の創作になるものらしい。その解説を読み進めてみよう。

#### 百首御哥

夏木立庭の野すぢの石の上にみちて色よきふかみ草  
かな

まずは一首の歌が掲げられる。これは新作組香の命名には、古歌等をふまえるのが倣いであることによる。右の歌は新古今時代の僧侶歌人慈円の歌で、その私家集『拾玉集』所収歌である。同じ歌は類題和歌集（歌を題で分類）『夫木和歌抄』にも収められており、確証はないが「百首御哥」という典拠表示から推測するに、おそらくは『拾玉集』から直接でなく『夫木和歌抄』によって引用したのではないかと睨んでいる。歌に詠み込まれた素材ごとに分類配列されたこの歌集は、連歌師などに重宝され、江戸時代に至る迄かなり活用された書物である。

この後に述べるように、この組香は牡丹花の号を有する肖柏にちなみ、牡丹の花を用いるところに趣向がある。その趣向を活かし組香に命名しようと思うならば、証歌を探すのに『夫木和歌抄』のような類題歌集は甚だ重宝であったろう。浄照坊藏『名香録』（組香の命名者の記事から推測するに、江戸前期の内容を伝えるものであろう。国文学研究資料館のマイクロによった。）にも、証歌に「夫木」と集付の見えるものがある。

さて、歌の後には次のような記事が続く。

永正帝の頃、洛陽に牡丹花老人、名肖柏、字夢庵といふ風雅の隠士あり。具平親王の遠孫にして倭歌を嗜み、「春咲ぬ花や心の深見草」といふ牡丹の発句を作り、夫より自ら牡丹花と称す。他に出家には牛の角を金箔を以て塗り、其牛に乗て書を読、樂行く。後年撰州呉服里に隠れ、小庵を縛むすびて夢庵と号す。常に酒香花の三つを愛て三愛記といふ書を述し侍る。

引用部に関して贅註をいくつか。

「春咲ぬ」の一句は、実は兼載句集『園塵』第二・夏部に「牡丹題にて」として見えるもの。そもそも作者が違うのである。『大発句帳』（古活字版）にも、この句は見えぬ。だが、肖柏の伝にこの句を載せることは、『続俳家奇人談』（天保三二八三年刊）も共通する。『奇人談』がわざわざ香道伝書を

参照して肖柏伝を記したとも想定しがたいところから、これに近い伝が何らかの形で広まっていたか。

「牛の角を金箔に塗り」というところは、誇張した俗伝とも見えようが、近衛信尹の『三藐院記』別記「古今聴観」に、「牡丹花、表徳号也、夢庵トイヘリ、肖柏事也、其身ハ中院ト云々、異壯なる人也、牛ノ角ヲ黄薄ニテダミ、唐鞍ヲカセ、洛中ヲノリタル人ト也、主ハ頭ヲ唐人ノコトクニシテ居ラレタルト云伝し」（史料纂集）と見えており、あなたがち虚構とばかりも断じ得ない。但し、これは天正十九一五九一年ごろの記事と思われる。既に肖柏没（大永七一五二七年）からでも六十年以上の歳月が過ぎている。そのまま事実と見るのは危ういだろうが、少なくとも奇矯な行動の人ではあったのだろう。ここに「黄薄」とあるのは金箔のことと見てよく、東京大学国語学研究室蔵の天正四年写『新撰類聚往来』に「金薄箔」とあり、「薄」と「箔」は通用。また『日葡辞書』には「Qinbacu. Folha de ouro. q Qinbacuuo voqu. l. vosu. l. qinbacude damu.」（金箔<sup>ば</sup> 金箔を置く、押す、金箔でだむ）とあり、金箔を押すことを「だむ」といった。

最後に肖柏の述作とされる「三愛記」だが、彼の愛した花香水の三つについて語った文章で、その中には先に触れた「荷葉」について、「香は沈水をもととして、此くににひさしく侍りし蘭奢待、紅麝、中河など名だかきを賞し、あはせたまきものは、梅花、荷葉、新枕等をもてはやし、…」(新校群書

類従)と言及されている。

なぜか連歌師肖柏の話題が唐突に記されるのだが、まずその前提として「深見草」の何たるかを知らねばならない。「一、牡丹<sup>ハ</sup>、廿日草、ふかみ草、山橘、是等皆同名<sup>云々</sup>」（今川了俊『言塵集』巻五、肥前島原松平文庫蔵本）と云われるように、まず「深見草」とは牡丹の異名。そこからの連想で、「牡丹花」の号を持つ肖柏の話題に至るわけである。それにしても一見迂遠なこの肖柏伝が、実は、以下に記すようにこの香の遊びの趣向に深くかかわっていることが次第に明らかとなっていく。原文の引用は煩わしいので、遊びの概略だけ述べよう。

同書の解説によれば、まず四種の香を用意する。三種をそれぞれ「酒」「香」「花」の香と称し五包ずつ用意し、残る一種を「深見草の香」とする。酒香花の各香を一包み試香して、香りを覚える。それが終わると、残る三種十二包を混ぜ合わせて区別がつかないようにし、中から三包を除く。残りの九包に「深見草香」一包を加え、都合十包となる。これを順に焚き、連衆（参会者）が香を聞く。

香の座に連なる者の意で、参会者を「連衆」と呼ぶが、これも本来的には「連衆<sup>レシシユ</sup>衆<sup>衆</sup>」（学習院大学蔵永禄十一年本『節用集』）とされるように、「連歌衆」を指すのが本義であった

と思われる。このような用語の一つひとつにも、連歌の影は色濃い。

さて、ゲームの始まる前に、各人には香札というものが配られている。札の表には様々な紋が描かれ、裏には酒・



立物の図 (『香道袖の橘』国立国会図書館蔵本による)

香・花、及び深見草と記されている。この札をもって解答をするのである。酒香花の札はそれぞれ四枚、深見草の札は一枚で、計十三枚が一組をなす。そしてもう一つこの組香で大事なものは、盤と立物(盤に立てること)の準備である。盤の形状と立物の姿については図を参照していただくのがよい。お判りのように、ここでは立物に牡丹と肖柏および牧童の人形を用いるところが趣向なのである。

では盤はいかように使うのか。まずは肖柏と牧童の役を二人に割り当てる。この二人は組となつてゲームを進める。残りの者は葉牡丹を一本ずつ割り当てられる。最初は葉牡丹を盤の端の孔に挿す。図で云えば一番下の孔である。人形も盤の溝の端(同じく図の下端)に据える。

香を聞き終えた者から、自分の牡丹の下に香札を置く。一炷ごとに正解が告げられ、当たりであれば自分の葉牡丹もしくは人形を一つ上に進める。要は双六の要領である。ただし客香(この場合には深見草香を指す)が当たりの場合には、二つ進めることができる。これにより一見して当たりの多い者が判るわけである。孔は十個空いているので、誰かが最上部の十番目の孔にたどり着けば、香が残っていてもその人の勝ちとなる。

牡丹もただ単に進むだけでなく、なかなか趣向が凝らされている。四番目の孔から五番目の孔に進む時、葉牡丹から蒼牡丹つばきに変わり、七番目の孔から八番目の孔へ移る時



も、荅牡丹から開牡丹ひらき牡丹に変わる決まりになっている。役割を終えた葉牡丹は三番目の孔に戻し、荅牡丹は六番目の孔に戻し挿したままとしておく。荅牡丹も開牡丹も紅白二種類が用意されていて、隣同士で紅白が互い違いになるよう選ばれ、盤上が鮮やかに彩られることとなる。十番目の孔に至った牡丹には、所定の短冊を付け勝ちの印とする。

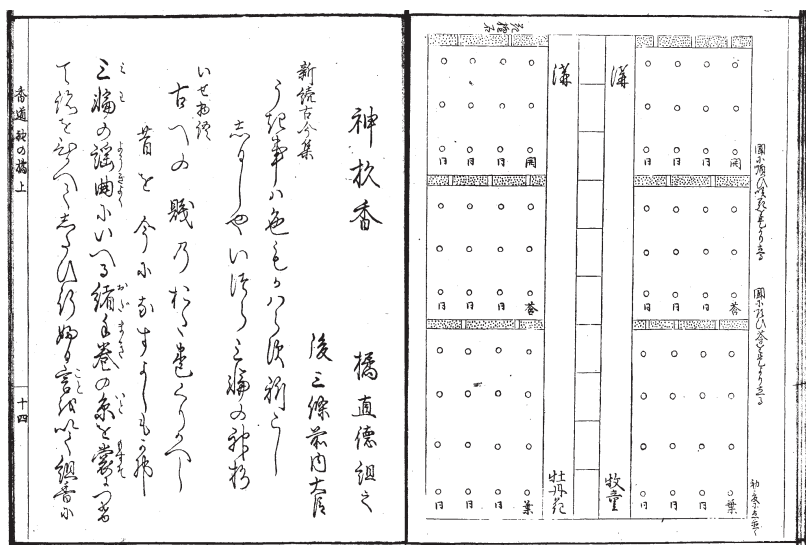
さて、一方の人形の扱いだだが、図を御覧いただけば判るように、肖柏の人形と牧童の人形は紐で繋がっている。

このことがルールにも関係している。即ち、肖柏と牧童とはそれぞれ別の者が担当して、香名の当り外れにより人形の進み方も異なってくるはずなのだが、両者の間は二目以上差が開かないよう、遅れた者は引き上げられる決まりなのである。故に一方のみが客香を当てた場合には、肖柏と牧童と双方を一目ずつ進めることとなる。また、肖柏の人形が五つ進むと図にある折枝を牛の角に付け、八つ進むとこれも図にある巻物を持たせて彩りを添える。牧童の人形が八つ目に至った時は、竹の筥を持たせることになっている。なお人形が十目進んだ場合は、辿り着いた人形を進行方向の逆に向けることで勝ちを示す。二つの人形が同時に勝ちとなる場合もありうるが、その場合には紐がよじれないよう双方を入れ替えて向きを変える。

\*

\*

念のため補足しておく、盤上の遊びを伴う形式は、



盤の図 (同右図)

この「深見草香」に限ったことではない。また、盤を利用するようになるのは、江戸時代に入ってからのことと考えるとよいだろう。ともあれ、香りという形のないものを利用しながら、様々な要素を組合せここまで遊びとして昇華させる、その熱意には感心させられる。そして、その際に連

歌の及ぼした影響力というものを、改めて実感するのである。ただし最後の深見草香の遊びは、よく考えれば直接連歌に関与するものではないことに気付くだろう。けれども、肖柏という連歌師に絡めてのこの趣向は、彼が『三愛記』により香を頌<sup>たた</sup>えたという縁だけが理由ではあるまい。やはり、香の世界が連歌に対する敬意<sup>オマージュ</sup>を忘れなかつた事実を表すものと思う。

#### 付記

文章中で紹介した以外に、香道については次の文献を参考とさせていただきます。ただし、なにぶん門外漢ゆえ、聞香の作法等について誤った記述があるかも知れぬ。お気づきの点があれば、ご指摘いただきたい。また、香合<sup>こうあわせ</sup>・薫物合の記録『五月雨日記』を論じた濱崎加奈子氏「香道・連歌的切断の美学―『五月雨日記』考―」（『ZEAMI 中世の芸術と文化』02号、二〇〇三年）も、香と連歌の関係を論じて有益だが、「連歌的」という肝心の点について、その記述は甚だ感覚的である。

- ・杉本文太郎・矢野環『増補<sup>改訂</sup>香道』（雄山閣、一九八四年）
- ・神保博行『香道の歴史事典』（柏書房、二〇〇三年）